１０月１２日（月）ヘブル人への手紙６章６節

「堕落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする者たちだからです。」

５節で「神のすばらしいみことばと、来たるべき世の力を味わったうえで」とあります。つまり、神様はすべてのキリスト者に対してみことばを通して語り続けておられます。さまざまな困難の中にあってもみことばをもって励まし、後に来る世の力と幸いとを示しながら、忍耐を与え、私たちの信仰の歩みを導こうとしておられます。しかしそれでもなお決してみことばに聞こうとせず、語られたみことばを聞いて悔い改めず、堕落してしまうなら、もはや神様のあわれみは残されていないということです。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」（ヨハネの手紙第一１章９節）とあります。自分の罪の告白をもって真実な悔い改めをするなら、神はご自分の真実にかけて、その罪を赦し、不義をきよめくださると言われているのですから、私たちは罪の悔い改めをもって、神に立ち返りたいと願わされます。繰り返しになりますが、それでも堕落してしまうなら、つまり自分で神の子をもう一度十字架につけてさらしものにするようなことをするなら、もはやそこには罪の赦しの道は残されていません。ドナルド・ギャスリーという新約学者が、「ある人々は、自分がそのような罪を犯したのではないかと深く悩む。しかし、仮に完全に堕落して、神の子をもう一度十字架にかけてさらし者にするような心根の者が、そのような心にわいてくる疑問に心を煩わせることがあるだろうか。そのように罪について心配すること自体、聖霊ご自身が働いておられる証しだ」と言っています。ですから、心にかかる罪があれば常に悔い改めて、赦された者として光の中を、回復された神との豊かな交わりを保ちながら歩めばいいのです。悩む必要はどこにもありません。

ここでヘブル人への手紙の著者は「さらしものにする者たち」との表現を用いています。まさにイエスは、私たちの救いのために自らさらしものとなって十字架の上で私たちの罪をその身に負い、罪ある者とされ、私たちの受けるべきさばきをすべて受けてくださいました。私たちは、そのイエスをさらにさらしものにするような信仰生活を送っているのでしょうか。もしくは私を罪から救うために、自らを十字架の上でさらしものにされたイエスに対して、今度は自らを通して栄光をそのイエス様に帰すような生き方をしているのでしょうか。決して十字架にかかられたイエス様を再度さらしものにするようなことをすべきではありません。

１０月１３日（火）ヘブル人への手紙６章７、８節

「たびたび降り注ぐ雨を吸い込んで、耕す人たちに有用な作物を生じる土地は、神の祝福にあずかりますが、」（７節）

イエス様ご自身も農業を用いたたとえを語られましたが、新約聖書には霊的真理を農業を通して例証されることがしばしばあり、今日の箇所もその一つです。ここは、信仰を守り通して成長する

人と堕落していく人との違いを土地に例えている箇所です。土地は一見同じように見えます。（もしかすると、見ただけで良い土地か悪い土地か見分けられる人がいるのかもしれませんが）また同じように雨も降ります。この土地だけは雨が降るが、ほかの土地には雨が降らないということは決してありません。そして、その雨が土地の中へ吸い込まれていくのも同じです。それでは土地の違いは一体どこに現れるかということですが、それは土地が生じさせる実です。雨が降って十分な水分があり、耕して熱心に世話をし、そしてその耕した人のために有用な作物を生じるなら、賞賛され、祝福を受けるのです。ところが、いくら耕して世話をしても、茨やあざみを生えさせるなら、無用なものとなり、のろわれ、最後は焼かれてしまうのです。

これは、私たちにも当てはまるたとえです。神様は、私たち一人一人に平等に降り注ぐ雨のごとく豊かな恵みを与え続けてくださっています。また私たちを、いつもみことばをもって霊的に養い育て、世話をしてくださっています。それは私たちが豊かな実を結ぶことが期待されているからです。神様が望んでおられるように、私たちが豊かな実を結ぶなら、聖書が約束している通りに、ますます祝福が増し加えられていきます。ところが、実を結ばず、茨やあざみなどの罪の実を結ぶなら、神様は私たちを無用なものとして、その実に従ってさばかれます。

私たち一人ひとりは、降り注ぐような神様の恵みを日々浴びながら、豊かな実を結ぶような土地とされているでしょうか。それとも、神様が降り注ぐように与えられた恵みが何の意味もないということになってはいないでしょうか。

１０月１４日（水）ヘブル人への手紙６章９、１０節

「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」（１０節）

ここで、ヘブル人への手紙の著者は、まず「愛する者たち」と呼びかけつつ、励ましを与えようとしています。「あなたがたについては、もっと良いこと、救いにつながることを確信しています。」と言っています。つまり、これまでヘブル人への手紙の読者たちを幼子だと呼び、1節「ですから私たちは、キリストについての初歩の教えを後にして、成熟を目指して進もうではありませんか。」と勧めを与えたりしていましたが、著者自身が、読者の一人ひとりをよく知る中で、必ず彼らが１０節にあるような互いに愛をもって仕える交わりにされていくことを信じ、期待しているのです。幼子と言われている者が、聖徒たちに仕え、神の御名のために愛を示す者へと変えられるのです。そして、そうさせてくださるのは、みことばを通して働く御霊ご自身の働きであり、神様の恵みです。決して人の力や説得ではありません。

私たちはすべてのことを神にあって期待し、確信しなければなりません。私たちが気をつけなければならないことは、自分で成熟したクリスチャンになろうとすることです。その時には必ず律法的になり、信仰生活が苦しくなり、成長しない自分に絶望します。また御名のためにとか、他の兄

弟姉妹のために何かをしようとする時に、祈らずして自分の思いつきや人目を気にして行うなら、非常に義務的な行いや奉仕になっていきます。昨日も学びましたように、神がみことばを通して真理の光を輝かせ、恵みの雨を降り注がせてくださり、私たちの心を耕しながら、世話をしてくださり、最後には実を結ばせてくださることを信じなければなりません。そのようにして、神様が自分を救ってくださり、これから信仰の完成へ向かって成長させてくださると信じられる時に、私たちは神様にすべてをゆだね、信じ、確信することができ、また祝福されていくのです。その時に奉仕も愛による奉仕へと変えられ、その愛のわざを主は確かにおぼえてくださり、私たちを大いに祝福してくださるのです。

そして、もう一つ大切なことは、神は不公平な方ではなく、私たちの働きや愛を忘れないということです。私たちは何かをすれば、すぐに目に見える成果を見たいと思います。愛の働きに対しては周りに感謝をされたいとか、目に見えて救われる人が起こされるなどの結果が見えなければ、とてもやってられないというような気分になるということはないでしょうか。すぐに結果は見えなくても、もしかすると地上では結果が見えなくても、主は私たちの愛や働きを決して忘れません。そのことが信じられれば、すべてのことを喜んで、報いを望まず、無私の奉仕として行うことができるはずです。

１０月１５日（木）ヘブル人への手紙６章１１、１２節

「私たちが切望するのは、あなたがた一人ひとりが同じ熱心さを示して、最後まで私たちの希望について十分な確信を持ち続け、」（１１節）

ここから私たちは、最後まで信仰を全うするために大切ないくつかのことを学ぶことができます。まず一つが、「あなたがた一人ひとりが同じ熱心さを示す」ということです。一部の人が熱心で、他の人は不熱心というようなバランスを欠いた信仰生活が教会の中に見られないようにすべきです。そして信仰者の熱心さは、義務感、自己満足、人の評判を気にするところから出るものではなく、主への献身や感謝、御霊が与える救いの喜びから出るものです。そして教会の中では、御霊から来る同じ熱心さが示されるべきです。

もう一つが、「私たちの希望について十分な確信を持ち続ける」ようにということです。私たちは、自分の持っている信仰において希望や確信を持つことができず、逆に信仰に対して疑いや不信仰を持っていては、最後まで信仰を持ち続けることができません。ユダヤ教に引き戻されることの問題は、この確信から来る喜びや希望を奪われることでした。私たちも世にあって信仰の歩みをする中で、信仰による将来における希望よりも現実の問題に目が奪われる中で、いつの間にか希望も信仰の確信も失われていくことがあります。常に自らの信仰に注意を払わなければなりません。

三つめが、私たちが約束のものを受け継ぐには、信仰と忍耐が必要だということです。さらには、「信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。」とありますが、イエス様が「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を

示したのです。」（ヨハネの福音書１３章１５節）と言われました。弟子たちにはイエス様に倣うことが求められていました。またパウロ自身も、「私に倣う者となってください。」（コリント人への手紙第一４章１６節）と言っています。私たちの教会の信仰の先達の中にも、怠け者とならず、信仰と忍耐によって約束のものを受け継いだ倣うべき方が数多くおられます。それとともに、今度は私たち一人ひとりが、後の世代の人たちに「私と私の信仰に倣う者となってください」と言える信仰生活を送っているでしょうか。私たちの信仰と忍耐が、すべての信仰者の模範となり、証しとなっていくことを願います。

１０月１６日（金）ヘブル人への手紙６章１３～１６節

「神は、アブラハムに約束する際、ご自分より大いなるものにかけて誓うことができなかったので、ご自分にかけて誓い、「確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたを大いに増やす」と言われました。（１３、１４節）

人は、何かを約束した時に誓いをたてていました。なぜなら人の言葉は、必ずしも信用できないからです。そして、しばしば人は「自分よりすぐれた者」すなわち神をさして誓いました。つまり神の真実にかけて誓うのです。そして、もし神に誓ったにもかかわらず約束を守らなければ、神に罰せられても仕方がない、つまり神に誓ってという時には、命がけで約束を守ることを表明することにほかなりませんでした。そこまでして約束するのであれば信ぜざるを得ないということになり、神の御名を用いた誓いは、人間のすべての反論をやめさせる効力がありました。

本来、神様の約束は必ず果たされるものであり、それを疑うべきではありません。私たちは神様が約束されたなら、その約束はいつの日にか必ず果たされると期待して待つことができるのです。しかしその神様が、アブラハムに対してご自分をさして誓われました。誓う必要などない方が、あえてご自分をさして誓われたのです。これはアブラハムに対する神様の謙遜な姿を表しているとともに、アブラハムの神に対する信仰をさらに増し加えようとする神様のあわれみとも考えることができます。

さらに神様は、アブラハムがイサクをモリヤの山でささげた後、創世記２２章１５～１７節で「わたしは自分にかけて誓う―主のことば―。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかったので、確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。」と言われました。神様は約束を必ず果たすことをアブラハムに確認させるとともに、彼の信仰を励まそうとされた主の意図があるように思われます。そして、実際にアブラハムはイサクの試練の後で、神が約束されたものを実際にそのとおりに得たのです。そして、このことはアブラハムが信仰と忍耐により約束のものを得た者としての、これ以上ない見本とされたと言えます。そして、ヘブル人への手紙の著者は、１２節で「怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となる」ことについて、アブラハムを例としてあげたのでしょう。

神様は、私たちにみことばを通して約束されたことを必ず果たされます。そのことをアブラハムにご自分をさして誓われたように、今を生きる私たちには御子イエス・キリストを通して、ご自身がいかに真実であるかを私たちにお示しになり、私たちの信仰を励ましておられるのです。みことばが必ず成就することを疑うことなく、堅く信じて、信仰と忍耐によって約束を受け継ぐ人たちに倣う者とならせていただきたいと思わされます。

１０月１７日（土）ヘブル人への手紙６章１３～１５節
「このようにして、アブラハムは忍耐の末に約束のものを得たのです。」（１５節）

１２節で、「その結果、怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。」とあり、昨日も書きましたが、倣うべき人としてアブラハムがあげられています。ここで私たちは、もう一度アブラハムの生涯を思い出してみたいと思います。創世記を見てみますと、彼は自分の生まれ故郷であるカルデヤのウルを出ました。そして１５章５節で神様はアブラハムに声をかけて、外に連れ出し、その星のようにあなたの子孫を増やすと約束されました。ところがいつまでたっても、自分に子どもが生まれません。そのように子孫がとても増えそうもない状況の中で、アブラハムは自分のところにいた女奴隷のハガルに子を生ませました。それは、もちろん神様のみこころにかなうことではありませんでしたし、家庭の中の争いの種を作ってしまいました。その失敗の後で、神様は永遠の契約として、子孫が豊かに与えられることを約束され、そして一人息子のイサクが誕生するわけです。しかし２２章を見ますと、せっかく与えられたイサクを今度はささげよと言われたのです。イサクをささげたら、神の約束はどうなるのかと思ってしまいます。しかしアブラハムは、神がお命じになったとおりにイサクをささげました。そして１３、１４節は創世記２２章１５～１８節を要約したかたちでの引用と考えられます。

ここで私は、アブラハムにならうべきことは「忍耐の末に約束のものを手に入れました。」ということです。「忍耐の末に」というのは、言ってみれば忍耐に忍耐を重ねて、やっと約束のものを得たということです。そしてこれが信仰だということです。神様からの約束のものを得るためには、時間がかかるかもしれません。そこで私たちは忍耐を働かせなければなりません。神様が私たちに約束のものを与える時には、私たちの考えとはまったく違うようなかたちで、時には考えも及ばないようなかたちで与えられることがあります。私たちは、そのような状況で忍耐しなければならないこともあるでしょう。いつも私たちは、主の約束のものを手に入れるために忍耐する用意ができているでしょうか。主は必ずご自身の真実にかけて約束を果たしてくださいます。それとともに神様は忍耐を私たちが身につけるために訓練させられることがあります。忍耐はクリスチャンにとっての大切な徳です。その忍耐を私たちはクリスチャン生活の中で身につけていかなければなりません。忍耐が私たちの徳として身についているでしょうか。忍耐を自分のものとすることができるように祈り求めてまいりましょう。

１０月１８日（日）ヘブル人への手紙６章１８～２０節

「それは、前に置かれている希望を捕らえようとして逃れて来た私たちが、約束と誓いという変わらない二つのものによって、力強い励ましを受けるためです。その二つについて、神が偽ることはあり得ません。」（１８節）

１８節で言われている「変えることのできない二つの事がら」というのは、神様の約束と誓いをさしています。つまり神様の約束は絶対であって、必ずそれは実現するということです。そしてご自分を指して誓われるがゆえに、約束が果たされないで反故にされるということは絶対にありません。私たちが、そこに信仰と希望をおいて歩むなら、決して失望させられることはありませんし、私たちはそこから「強い励ましを受ける」ことができます。そして、それをより確実なものとして私たちに信じさせるのが、忍耐の末に約束のものを得たアブラハムの信仰の証しです。

そして、私があらためて気がつかされたのは、私たちは望みに生きる民だということです。私たちは、信仰により確かな望みを持つことができるのです。そして、「私たちが持っているこの希望は、安全で確かな、たましいの錨のようなものであり」とあります。どんなに暴風雨が吹き荒れても、錨を降ろしていれば船は安全です。私たちも、たましいに希望という錨をおろしていれば、自分の回りにどんなに嵐が吹き荒れても安全です。以前にある本を読んでいた時に、サタンは必ず人に絶望をもって誘惑し、人に信仰をなくさせようとすると書かれていました。信仰の歩みの中で決して絶望しないように主に守っていただきましょう。

さらに「また幕の内側にまで入って行くものです。」とありますが、幕の内側というのは、神殿の至聖所と呼ばれる場所です。つまり神様の臨在しておられるところです。本来、人は、そこへ入って行くことができないのですが、２０節を見ますと「イエスは、私たちのために先駆けとしてそこに入り、メルキゼデクの例に倣って、とこしえに大祭司となられたのです」とありますように、イエスは、私たちに救いを与えてくださり、よみがえられることで神様が私たちに与えられている約束による希望がどんなにすばらしいものが示してくださり、私たちはその主イエス・キリストの贖いのゆえに幕の内側にまで入って行くことができ、神のみもとに近づき、主の臨在をおぼえつつ、主の御顔を仰ぎ見ながら希望を常に神様に置き続け、その希望を互いに告白し続けることができるようにされています。

私たちは、今日も神の約束による希望によって歩んでいるでしょうか。主にこそ決して失われることのない希望があるのです。またその希望を与えてくださった主に心から感謝いたしましょう。